

第 2 回部会資料

(テーマ 2)

活動見直しやデジタル活用、負担軽減策など、持続可能な地域コミュニティに向けた仕組みづくり

令和 6 年 1 2 月 1 0 日

地域コミュニティ活性化推進審議会 第 2 回部会資料

テーマ2の部会の進め方

第1回部会

それぞれの
テーマに関する
京都市の取組の
説明



出席者による
フリートーク
(発散的に)

論点整理



第2回部会

論点に関する
フリートーク
(収束的に)



まとめ

今年度第1回部会における論点まとめ

現状・可能性	課題	できたらいいこと
(デジタル活用について) ・教えてくれる人(若い世代)がいる ・スマホ講座へのニーズ ・「寿司屋のアプリ使いたい」がデバイス対策の一步目にも ・情報伝達や魅力発信など一方向 ・隠れた経費と時間の削減 ・柔軟な活動への理解促進 (活動の持続可能性について) ・関わる人の主体性 ・地域と関わる団体(学生)の思いが同じ方向に ・何度かぶつかればわかり合える (活動見直しについて) ・新しい人が入り、多様性への理解が進めば地域も変わり得る	・高齢世代の苦手意識 ・これまでのやり方変更への反対意見 ・移行期の工夫 ・コミュニケーションには不向きな面も ・関わりたい人と地域団体にギャップ ・大学や行政主導では続かないことが多い ・メンバーが固定化し、活動マンネリ化 ・(外国人など)広く関係する当事者の声を拾う必要	・若い世代等によりスマホ講座が広がる ・リアルとデジタルのバランスが図られている ・地域の魅力が伝わる ・お互いのニーズや期待値を共有するコミュニケーションが行われている ・多様な人、主体によるコミュニケーションを基に新たな選択肢や取組を検討していく

今年度第2回部会における論点と方向性

<第1回の議論を踏まえた方向性>

【理想的な状況】

- 性別や年齢、国籍など地域を構成する人の多様性を踏まえ、双方向のコミュニケーションを基に、誰もが参加しやすい関係性で活動が行われている。
 - 若い世代とデジタルを苦手とする高齢者など、様々な主体の交流により関係が築かれ、デジタル活用のきっかけが生まれる。
 - リアルとデジタルのバランスが取れ、情報発信の迅速化や魅力発信の強化、役員等の負担軽減が進む。
- 地域活動やボランティア活動を知る機会や学生・企業等の多様な主体が交流できる機会や場がある。
 - 地域活動に関わりたい主体と地域団体とのギャップを埋めることができる。
 - 学生や地域企業等も一主体として、(自身の得意分野等で)地域と一緒に活動に関われる。

⇒ 「地域課題の解決」や「やりがいや楽しさ」、「活動の継続性」の好循環の実現

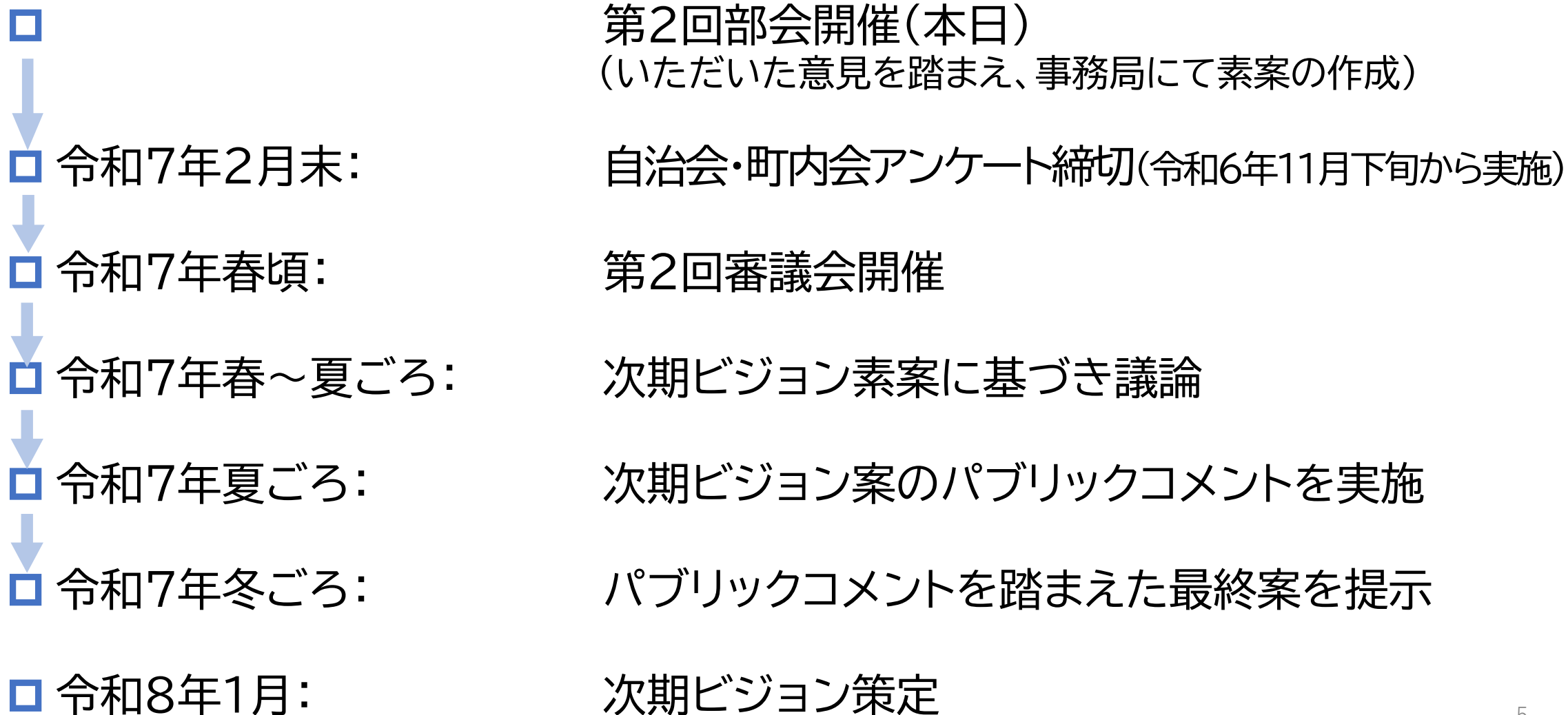
<第2回部会で深めたい視点>

- ・ 多様性への理解や双方向のコミュニケーションを進めていくに当たり必要な視点や取組は？

<新たに御意見をいただきたい視点>

- ・ 「地域活動に接点を持ちにくい地域住民」への働きかけ方、接点の持ち方は？
- ・ 「地域企業」や「NPO」等について追加すべき視点や取組は？

今後のスケジュール(案)



テーマ1の部会における意見(抜粋)

- 単純に人の役に立ちたいというボランティアの精神もあれば、企業であれば社内の活性化に繋がる具体的なメリットを考えている場合もある。元々その地域に貢献すること自体がビジネスと地続きだということもあり、目に見えないところも含めて本当に様々である。企業も大学も地域団体も、地域活動に関わる動機は様々。
- 人同士が一緒に何かするというのは、企業、大学、地域団体といった一括りでは考えられないため、「個人」としての関わりをどうマッチングしていくかが大事ではないか。マッチングのきっかけになるのは、場所かもしれないし、人かもしれないし、あるいは情報や広報かもしれない。
- 自治会の役などの当番や地域に根付いた伝統的なお祭り、運動会などをきっかけに、半強制的に地域活動に参加する仕組みがあるが、それだけでは持続可能ではない。やらされ感だけでなく主体的に関われるなど、既存の取組を守りながら活かしていく必要もある。
- 例えば企業がボランティアを推奨し、社員がボランティアに参加してもいいと思えるような仕組みを作っていくこともこれからの時代には大事ではないか。
- 子供が参加して楽しく体験できる場があれば、将来成長した時に、地域のために何かやってくれるという効果もある。長期的な視点からの地域人材の投資という意味でそのような場づくりは有効ではないか。
- 潜在的に地域の役に立ちたいと思っている方はいるので、参加のきっかけ作っていくことが大事。